

Trial & Error

No.264

January-February 2008



<写真：イラク・ファルージャにおけるイラク国内避難民への食料支援の様子(2007年9月)>

特集

イラク：混乱の中を 生きる人々とともに

イラク： 混乱の中を生きる 人々とともに

今なお混乱の中にあるイラク。「対テロ戦争」「宗派対立」といった、ある意味ステレオタイプな情報が氾濫する中で、現地で起きていることを本当に理解するためにはどうすればよいのか。そして、日本に暮らす私たちに何ができるのか。11月末、イラクに関して造詣が深い酒井啓子氏に講演していただく機会を得た。JVCの現地支援の報告と共にお届けする。(編集部)



写真 / 中井幹雄氏

イラク

混乱の背景にあるものは

東京外国語大学大学院教授 酒井啓子

■「死傷者減」の数字を どう読むか

この数カ月でイラクにおける米兵・民間人の死者数が減ってきたと発表されている。といっても数字に表れるのは確認された死者数だけなので、数字に表れない民間人の死者を認識する必要がある。いずれにしてもこのような統計が出ることは、アメリカにとって都合だ。駐留米軍の司令官であるペトレイアス氏が九月に、「イラクは安定してきたので米軍は人員を減らしても大丈夫だ」という報告を出した。それを受けて、ブッシュ大統領はイラク戦争開戦から初の兵士削減を決めた。しかし、「アメリカの読みが正しかったから治安が改善され、その結果兵士を減らせるのだ」という見方は逆だと思う。九月以降死傷者が減っている背景には、米兵を減らすと決まったので攻撃の手が抑えられた、ということがあるのではないか。

■行き場のない難民

最近の大きな問題は国内避難民、国外難民の発生だ。ヨルダン、シリアがイラクからの難民を受け入れてきたものの、一昨年からヨルダンは受け入れていない。その分シリアへ百五十万人もの難民が流入したが、この数カ月はシリアも国境を閉じてしまった。ここで問題になっているのは、シリアやヨルダンの国境閉鎖よりも、シリア・ヨルダンの先に難民たちの行き場がないことだ。難民の問題は、先進国が最終的にどう受け入れるのかという点が課題になっている。

■経験したくない 「宗派対立」

報道などではよく、「イラクでは〇六年二月(シーア派聖地サマラーのアスカリ廟爆破事件)以降宗派対立が激化していわゆる内戦的な状況となり、難民が急激に増えた」という説明がなされている。確かに宗派対立的な様相だということは否

■プロフィール

東京大学教養学部卒業後、英国ダーラム大学で修士号を取得し、アジア経済研究所勤務。在イラク日本大使館調査員、アジア経済研究所参事等を経て、〇五年より東京外国語大学大学院にて地域文化研究科・中東イスラーム研究教育を担当。著者に「イラクとアメリカ」「イラクはどこへ行くのか」他多数。

定しない。しかしあくまで、「宗派対立的な形をとっている」ということを強調したい。背景に政治的な要因があり、見た目に宗派対立的な状況になっている。

イラクではこれまで宗派が原因で殺し合うようなことはなかった。「シーア派政党」「スンニ派政党」というとらえ方もかつてのイラクではなかった。今、イラク人自身にもコントロールできない抗争になってしまっている。長年イラクに住んでイラクの社会を知り尽くしている人たちでも、宗派による対立は体験したことがない。経験がないから対処のしようがない、だから逃げるしかない。それが今の難民発生の状況ではないだろうか。

■急すぎた政治プロセスが 生んだ混乱

新しい形の抗争が起こったのはなぜなのか。イラク戦争以来の様々な政治的变化が、この抗争を引き起こしていると考えられる。イラク戦争後に急いで選挙を二回



■イラク事業現地調整員の田村(左)も帰国し、国内避難民への食糧支援の報告を行なった。



■講演会では、数十名の参加者が熱心に講演に聞き入っていた。

■宗派内・与党内の対立が 事態をより深刻に

ここまで深刻な状況になった理由として、同じ宗派内、政権与党内でも派閥抗争が激化したことが挙げられる。シーア派の与党連合もいくつかの政党の寄せ集めだ。どの政党もシーア派中心でイスラム主義を掲げているが、必ずしも同じ考えを持っているわけではない。現在の首相のマリーキはダアワ党の党首だが、マリーキ政権のもと

行ない、国民投票で憲法を決めるという形で民意による政権樹立を急いだ。しかし急いだことによって、特定の宗派、特定のイデオロギーの政党が過度に力を持つことになってしまった。治安や経済的な基盤がしっかりする前に選挙を行なったことで、治安を守れるという民兵を持つ政党、資金力のあ

る政党が当然ながら選挙に勝ち、警察・治安維持を握ることとなってしまった。「別の地域からよそ者が警察だと名乗って自分たちの地域をコントロールしている。民兵なら自分たちも持っているのに」そんな不満が各地で起き、抗争の原因になっている。今の与党がシーア派のイスラム主義政党が大部分を占めているため、「シーア派對スンニ派」という宗派對立のイメージが生み出されている。

■米国議会で浮上した イラク三分割案

現在の議会においてサドル派が与党から抜けたことを前提にすると、与党は過半数に行くかどうか微妙になる。まさに与野党拮抗(きつこう)の状況で、どちらも半数が取れず、何事も決まらないという状況だ。

このような状況をアメリカがどう考えているか。九月に米国議会上院で「イラク三分割案」なるものが採択された。イラクを一つにまとめて統治するのは難しいので、まずはクルド地域や南部など落着きそうな所から手をつけるという考えだ。相変わらずアメリカとしては、北はクルド、中部はスンニ、南はシーアと切り離してコントロールすれば収まるに違いないという単純な考えを持っているようだ。今、最も問題になっているのはシーア派同士の対立だ。シーア派、スンニ派、クルドで切り離せば

■クルド地域は安定しているのか

大丈夫ということでは決していない。それでも北部のクルド地域だけは大丈夫だろうとアメリカは期待していただろう。実際にオーストリア航空が就航するなど、ヨーロッパの民間企業もクルド地域に向けた商業活動を強めている。

しかしそんな矢先に、トルコ軍がイラクのクルド地域へ越境攻撃を行なうかもしれないという問題が起きた。トルコは国内にクルド人という少数民族を抱えている。イラクやイラン以上に、トルコにおけるクルド人は民族的な権利を否定された存在だ。イラクでクルド人たちが政治的な自立、自治、さらには独立を実現しようになると、トルコ内のクルド人が影響を受けては大変だと、必ずトルコが介入してくるのだ。安定していると見られがちな北部のクルド地域も、トルコの要素を考えると決して安定的ではない。

■存在感を持ち続ける イラン

トルコの他にもう一つ考えなくてはならないのは東の大国イランだ。イラクで与党にある政党は、多かれ少なかれイランとのパイプがある。イランは直接介入しなくて

も、イラクにいる古い友人に一本電話すればイランの意図が通るような人材配置の状況にある。これはイランにとって大きな強みだ。

アメリカ軍が撤退した後を考えると、周辺国に相当大きな発言権が与えられることになるのは必須だ。イランやトルコをはじめとした周辺国がポスト・アメリカを考えて様々な形でイラク国内に介入することがイラク国内の派閥争いに反映され、対立の激化につながっている。

■国際社会で解決は可能だ

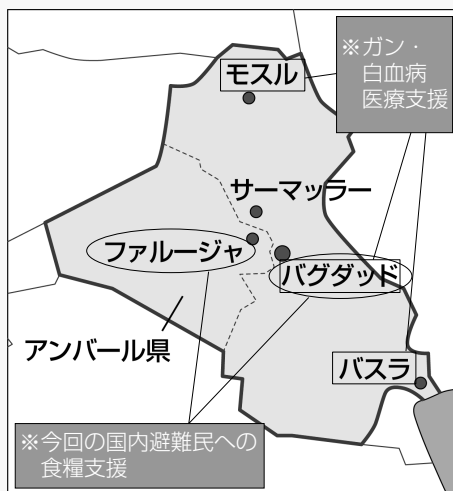
イラクのこの混乱の原因は、宗派對立や民族對立ではない。政治的な原因で派閥對立が起きているのだから、政治的な解決策によって解決できうる問題なのだ。他国の介入は国際政治の問題であり、国際社会が解決できない問題ではない。トルコやイランを巻き込んだ形で総括的なイラクの将来を話し合うような国際的な枠組みを作って解決していくことは十分可能だと言える。宗派對立や民族對立という「イラクは昔からそういうことで對立しあっているから、たくさん難民や死傷者が出ても我々が手をつけられないことだ」と思われがちだが、決してそうではないということを理解していただきたい。

国内避難民への食料支援

07年9月末から10月上旬にかけて、バグダッドとファルージャの国内避難民（それぞれ496家族、566家族）に、約2週間分となる豆と米を配布しました。ラマダン（断食月）明けのお祭りも近く、食品の価格が高騰する中で配布されたこともあって、大きな感謝を持って受け取ってもらえました。



■これまで支援が届かなかった地域にも届けられた。（バグダッド）



『ポスト・サーマッラー』の中、国内避難民の手にわたった食料

イラク事業現地調整員 田村幸恵



■プロフィール
津田塾大学大学院国際関係学修士課程後、シリアにて大使館専門調査員、日本パレスチナ医療協会事務局勤務などを経て07年六月より現職。津田塾大学国際関係研究所勤務を兼任。

■増加した国内避難民

イラクでは依然として中央部の県を中心として戦闘状態は続いており、避難民は増える一方だ。イラク戦争直後から百万人を数えた国内避難民は、〇六年以降倍増し、現在二百二十万と^{※①}言われている。

国内避難民の増加は、直接的には〇六年二月にサーマッラーで起こったシーア派の聖地アスカリ廟^{びやう}の爆破を契機としている。このため、現在の国内避難民増加の状態は『ポスト・サーマッラー』と呼ばれている。そして、イラク国内の南部、中央部、北部それぞれ宗教・民族の名の下に権力闘争を目的とした各種派閥の民兵組織結成とその組織を駆逐しようとする多国籍軍との戦いが、避難民を倍増化させた間接的な契機となっている。

『ポスト・サーマッラー』の無法状態や混乱、戦闘を避けるために、イラクの人々は国内で安全な場所を模索し、首都や地方都市部から

逃れて戦闘のない地域へ避難している。親類縁者を頼って寄宿する人たちが、あるいは空き家に住みつく人たちが多い。避難民キャンプも今年からでき始めた、とUNHCRは^{※②}捉えている。

■治安の改善は依然難しい

〇七年冬の今現在、日本のほとんどの人は「イラク戦争は終わった」と認識しているだろう。しかし、イラク人のほとんどは「戦争状態」継続の状況と、その苦しみを語っている。イラクからヨルダンの学会に来ていた医師は、この一年半以上、勤務する病院以外に自分の居住地域以外へ出たことがなかったと話す。自らの近隣者のいる地区をいったん離れば狙撃兵に狙われ、検問所では宗派にかこつけて民兵に理由なく拘束される。また、医師や教員などの知識人を狙った誘拐が横行していることもあり、身の安全を守る事は非常に難しいという。

イラク戦争の「終結宣言」後も、略奪と誘拐、表立っては報告されない女性・子どもへの暴行などは、イラク全土にひろがっている。そして、そうした暴力行為を取り締まるはずの警察や軍隊自体が、住民を守るのではなく、地域の勢力におもねって脅迫や追放の片棒を担ぐことすらあると言われている。また、多国籍軍の駐留兵士がいかなる「テロ対策活動」を行なっているのかを一般の報道で知ることが難しい。〇六年冬まで実施されていたアンバール県での掃討作戦では、包囲と厳しい外出禁止令に多くの住民が巻き込まれ、外部からの支援物資の運搬も禁じられた。イラクの治安は、イラク暫定政府が設立されて三年たった今も、イラク警察でもイラク軍でも、ましてや多国籍軍でも維持できていない。混乱の高い地域（主に都市部）を逃れることも、周辺国に出る事も難しくなっている。国内で安全な地域を転々としていくことから、

※注① IOM（国際移住機関）2007年7月発表より。

※注② 2007年9月、アンマンにおけるIDPワーキンググループミーティングにおける発言より。

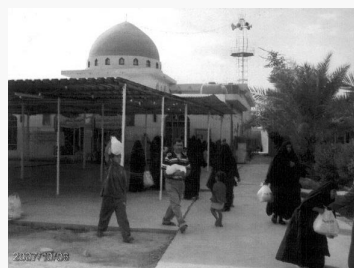
■ 混乱が続くイラクとそこに住む人々のために遠く離れた私たちにできることは、まずは「忘れない」こと。JVCの活動などを通じて、引き続きイラクに関心を持ち続けていただくようお願いいたします。



■ 今回配布した米と豆。(ファルージャ)



■ 働き手である男性がいない避難家族も多い。(ファルージャ)



■ 人々の避難場所となっているモスクで配布する。(ファルージャ)

■ 国内移動すら困難に

通常イラクでは、配給カードを元に、政府から小麦粉、油、砂糖など基本的な食料を受け取っている。しかし、居住地を離れるとその配

ある一定の場所に避難民が集中することをおそれた地方行政は、今夏から避難民の流入の規制を始めた。



■ この一抱えで2週間分となる。(ファルージャ)



■ 支援物資の豆。(バグダッド)

給を受けることはできない。そもそも中央政府からの支給が滞っているアンバール県では、住民もこの夏まで食料配布を受けていない。アンマンで会ったアンバール県出身者は「仮に配給があっても、それだけでは家族(平均六〜七名)を養うには不足だ。配給には肉や卵、豆などは含まれていない」と言う。

バグダッドでも同様に、避難民を受け入れる側の住民も、戦後の混乱で食料の供給が少ない。バグダッドからアンマンに出てきたイラク人は、「市内でも食料の値段は少しずつ上がっている。食料品店をやるのは狙われやすいので命がけだし、商品の仕入れも手間がかかるようだ」と語る。シーア派地域に入った商品を、すぐ近くのスンニ派地域に運ぶトラックの運転手がいなかったために、何日も野菜や果物が近くの店に並ばず、不足している物の値上がりが激しいという。衛生的な水の供給もかなり滞り、一日一〜二時間しか供給されない電気を分け合って暮らしている。しかし、避難民の流入によって少ない資源の更なる減少を嫌って、各地方行政は避難民の入域を規制し始めたのだ。水・電気などの供給インフラが破壊され、それを復旧させる人材も安全な環境も確保できない状況の中で、今以上の避難民の受け入れは不可能であると

判断したと言われている。身分証明書を偽造して政治活動などを始める者によって治安が悪化することを恐れている。

アンバール県では、行政を取り仕切っている部族勢力が、バスラなど南部からの避難民受け入れを地縁血縁がないことを理由に断ったという(国際NGO調べ)。この地域では、多国籍軍の中でも米軍がアル・カイダ退治と称して、住民を巻き込んだテロ掃討作戦を繰り返してきた。部族が保証できない「他者」を域内に入れることによって、アル・カイダのような「外部」の攪乱分子の存在(ヨルダン難民へのインタビューでは、八〇%以上がアル・カイダは戦後入ってきたと回答している)と、それに続く多国籍軍の掃討作戦を恐れていると言える。

■ 避難民への支援が生活を取り戻すきっかけに

しかし、現時点ですでに多くの避難民生活を送っている人々がいる状態において、彼ら／彼女らをこのまま放置しておくことは、さらなる混乱を助長しかねない。避難先に就職口はなく、その日その日を生き延びるのみである。一家の主要収入獲得者の多くは男性・父親であるが、彼らこそが不当逮捕の対象になり、または殺害されるなどで、国内避難民の家族には

不在であることが多い。国内避難民の八二%が、女性と十二歳以下の子ども^{※注②}だ。また、生活苦から一家の青年層が職を得るために民兵に加入することは珍しいことではない。十三歳くらいから、男子は給料を得るために何らかの組織に加入することが多い。女性は売春を行なうことが最も手取り早く収入を得る方法となっている。もっと年齢が下の者は、道で物売りをするなどして家計を助けるために学校に行けなくなっている。

こうしたことから、避難民の生活状況が安定しない限り、その地域の不安定化をいやおうなく押し進めてしまふ可能性がある。

◎

JVCは今年からイラクの国内避難民を対象に活動してきた。この九月の末には、ファルージャで約五百六十家族、バグダッドでも居住地を追われたクリスチャンの約五百家族を対象に、一家族の二週間分にあたる米五キロと豆二キロを配布した(ページ上部枠参照)。十一月末から、現地NGOと協力してもう一度ファルージャでの食料支援を行なう予定である。イラクの一番弱い立場にいる人々、逃げ場のない人々に渡る食料は決して充分とは言えないが、彼ら／彼女らが通常の社会生活を取り戻すための助けとなることを願う。

※注③ イラク赤新月社 2007年11月発表より。

年	イラクの動き	JVCの活動
1990	クウェート侵攻 経済制裁発動(国連決議 661 号)	
1991	湾岸戦争 (1 月 17 日—2 月 28 日) 国連安保理、湾岸戦争停戦決議 687 号採択	・食糧、粉ミルク、医薬品の緊急支援 ・神奈川県の協力により水状況調査 浄化用塩素の支援
1992	クルド自治政府が発足	
1996	国連、「食糧のための石油」計画開始	
1999	湾岸戦争とその後の経済制裁でのべ100万人以上のイラク人が死亡(ユニセフ推定)	
2002	国連による大量破壊兵器査察再開(安保理決議 1441 号に基づく)	・9.11 以降、アメリカのイラク攻撃 反対へ向けたアドボカシー開始 ・子どもの絵画交流
2003	イラク戦争開戦 (3 月 20 日) サッダーム政権崩壊(4 月 9 日) ブッシュ大統領、「大規模戦闘終結」宣言(5 月 1 日) 国連決議 1483 号を受けて連合国暫定当局(CPA)発足 国連バグダッド事務所爆破事件(8 月 19 日)	・赤新月社母子病院に看護師派遣 ・ 白血病の子どもたちへの医療支援 (継続中)
2004	自衛隊イラク派遣(2 月) 日本人人質事件 アンバール県ファルージャの戦闘(4 月 11 日) CPA から暫定政府へ主権移譲(6 月 28 日)	・イラクで医療支援を行なっている NGO 等に呼びかけ「日本イラク医療 支援ネットワーク(JIM-NET)」を立ち 上げる
2005	国民議会選挙実施(1 月 30 日) 移行政府発足(4 月 28 日) 新憲法草案の是非を問う国民投票、憲法承認(10 月)	・ファルージャにおいて紛争被害者への 緊急支援
2006	シーア派聖地サマーラーのアスカリ廟で爆破事件。以降、宗派抗争が激化する(2 月 22 日) 国内避難民の増加 統一イラク同盟(UIA)が首相にマリーキを擁立、連邦議会が再開 正式政府が発足(5 月 20 日) フセイン元大統領の死刑執行(12 月 30 日)	・「イラク自衛隊撤収に関する公開質問 状」を提出
2007	ブッシュ大統領が 21,500 人のイラクへの増派を決定(1 月 10 日) 英軍がバスラから撤退開始(9 月 3 日) ブッシュ大統領が兵力削減を表明(9 月 13 日) コレラ感染拡大	・「イラク特措法改正に関する公開質問 状」を提出 ・ ファルージャ、バグダッドにおいて国 内避難民への支援

患者は戻ってきた、しかし医師がいらない ——

代表理事 谷山 博史

イラクでの小児急性性リンパ性白血病の生存率は三年間で四五%と言われている(欧米八〇%)。原因は最新の診断検査機材の欠如、輸血・血液製剤、抗生剤の欠如、感染症の多発と有効な抗生物質の入手困難、通院の困難などである。JVCとJVCが運営委員会のメンバーとして参加しているJIM-NET(日本イラク医療支援ネットワーク)は、〇四年以来、米軍が使用した劣化ウラン弾が原因と指摘される白血病の子どもたちの支援を行ってきた。

しかし、治安の悪化が患者の通院を困難にし、医師たちの身に危険を及ぼしている。アンマンに駐在しているJIM-NETの西村氏の最新の報告によると、バグダッド中央小児病院では六名いた医師が引退や国外退避などで二名になってしまい、受け入れできる患者が激減した。南部バスラでも医師への脅迫や殺害が報告されている。産科小児病院の医師が殺害され、バスラ教育病院の医師は脅迫を受け退職したと噂だ。



■バスラの産科小児病院で治療を受ける子ども。

明るい情報もある。同じく西村氏の報告で、バグダッドの子ども福祉教育病院の七、八月の newcomers は二十、二十五名、入院・通院を含めたべ人数は四百、四百五十名。バグダッドの治安は一、四月と比べると安定し、一時市内への通院が困難だった患者が戻ってきているという。一方、北部モスルのイブン・アル・アシル教育病院では、七、八月の newcomers は七、八名、入院・通院を含めたべ人数は二百、二百五十名。治安の理由でバグダッドや他の県から患者を受け入れていた四、五月に月二十五名もいたのに比べると減っている。

アメリカ政府はバグダッドでの治安作戦の成功と米兵削減を発表しているが、地域によって状況は流動的でまだまだ楽観はできない。JVCは、JIM-NETを通じた支援などを通して、引き続き状況を見守っていく。

※注① 米軍によるバグダッドでも治安作戦の一時的な効果の現れだと見られている。しかし、対抗する武装勢力は治安維持が強化されたバグダッドから他県に移動したために、武力対立や米軍の掃討作戦は他県に波及しているとも言われている。

宗教者間対話から考える パレスチナ／イスラエルの平和

11月11日から16日、パレスチナ／イスラエルから、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の宗教指導者で学識者のお三方を日本にお招きし、日本の仏教者や学識者を交えてのシンポジウムや対話、意見交換会を持ちました（東京、京都、大阪で計7回、合計約300名が参加）。

■十二日の公開シンポジウムの様子。それぞれの立場からパレスチナ／イスラエル問題に関して意見を発する宗教指導者たち。



今年の春に、JVCを長くご支援いただいている仏教系NGOのアーユスの会員の方々がエルサレムを訪問されました。その時に宗教者の方々と意見交換をされ、このときの経験をもっと多くの日本の方々とも共有し、またより深い議論をしたいという思いがきっかけとなり、アーユスとの共催で今回の招聘が実現しました。

JVCパレスチナ事業では、「平和創造・平和構築」も視野に入れて活動しています。人々の平和への願いを実現するために、双方の平和に向けた努力、双方を理解するための努力をなんとか手助けしたいと考えています。今回の宗教者間対話もその一助になることを願っています。来日されたお三方は、仏教という宗教の視点に関心を持たれ、対話や教育への支援の必要性や、パレスチナ／イスラエルの問題が「忘れられていない」よう関心を持ち続けてほしいと訴えられました。

今回の対話を通して、共感したこと・学んだことを、一度のイベントで終わるのではなく、平和を求める活動に向けて、今後にどうつながっていくかが、次の課題としてあげられています。以下、来日されたお三方の発言の一部をご紹介します。

ユダヤ教

ユダヤ教ラビ
イエホヤダ・アミル氏

ヘブライユニオン大学イスラエル・ラビ・プログラム長



「（ユダヤ教において）神は人間を極めて個別的で個々が特別で唯一の存在として創造された。平等とは、同質ということではない。私たちはこの世界と他者の生命と幸福に対しての責任を果たすことを学び、私たちが平等であると同時に、私たち一人ひとりが特別で唯一な個人であることを認識しなければならぬ。紛争状況において、その苦しみを取り除くために力を貸してほしい。イスラエルとパレスチナ双方の苦しみは、対照ではない。しかし、平和の実現のために、苦しみ両者に共感・同情を持ってほしい」

キリスト教

キリスト教司祭
ジャマル・ハデル氏

ベツレヘム大学宗教学部長



「パレスチナのキリスト教徒は、アラブおよびイスラム世界の一部である。私たちは紛争状態に暮らしている。まず、占領は不正義で、終結しなければならない。第二に、抵抗は暴力的にも非暴力的にもなりえるが、キリスト教徒は非暴力抵抗を求める。第三は、私たちの立場は原理的キリスト教および人の原則に基づく。全ての人はその尊厳において神の前で平等である。全ての人は同じ権利と義務を負っている。誰も宗教的あるいは政治的理由で他人に支配（服従）させられてはならない。全ての人は安全に生活し自らの独立した政府を選ぶ権利がある。これはイスラエル人もパレスチナ人も同じである」

イスラム教

イスラム教シェイフ
バラカット・ハサン氏

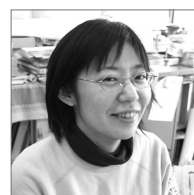
パレスチナ自治政府教育省カリキュラムセンター人文社会科学局人文部長



「イスラム教は相互理解と調和および相互尊重により非イスラム教徒との関係を維持してきた。イスラム教は、キリスト教や他の宗教を尊重するように、ユダヤ教を尊重し敵対的な態度はとっていない。しかし、パレスチナ人は（ユダヤ人国家としての）イスラエルに対して別の見方を持っている。イスラエルがパレスチナにやってきて、その土地を占領し財産を没収したと見ている。それでも、パレスチナ人は平和を信じ、隣人としてのイスラエル人と国連決議や国際法に基づいた公正で恒久的な平和を結ぶことを期待している」

食糧・医薬品・住宅建設 —— 冬への備えを急ぐ被災地

コリア事業担当 寺西 澄子



支援概要



支援場所
・江原道内の
病院（2カ所）、
育児院

支援物資

- ・抗生物質、点滴用栄養剤、胃腸薬などの医薬品（約250万円分）
- ・総合ビタミンビスケット（約8万円分）
- ・携行用浄水器（2台）



■江原道育児院でビスケットを手渡す
KOREA こどもキャンペーン事務局長の
筒井（右端）。



■江原道人民病院で支援の医薬品を手取る
医師たち。

車窓から見える山々は紅葉に彩られ、田には刈り取った稲束の山がいくつも積み重ねられている。しかし、冬支度の雰囲気がいまひとつ感じられない。数年前のほぼ同じ季節に来たときは、街でも村でもいたるところに白菜が山と積まれていたのが印象的だったが、その風景を見かけないせいか、「夏の大雨で水に浸かってしまった畑では、種をまきなおしたところも少なくない」と案内の李さん。朝鮮半島の人々にとって、厳しい冬を迎える前のキムジャン（キムチを漬けること）は重要行事なのに、と気にかかる。

今年八月初旬に、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）を襲った集中豪雨。その被災者に対する医薬品支援のため、十月二十四日から四日間にかけて、東海岸に位置する江原道を訪れた（経緯に関しては、本誌前号を参照）。江原道は山がちで、今夏の豪雨でも山崩れ、貯水池や河川の決壊が各地で起きており、報告されている被災者数も他地域に比べて多い。日本から持参した抗生物質、携行用浄水器のほか、平壤で購入した栄養剤やビタミンビスケットなどの支援物資を詰め込んで車を走らせた。平壤から江原道の道庁所在地である元山までは通常三時間ほどだが、途中、被害の大きかった地域があり、険しい峠を越えるなどの迂回路をとらなければならず、五時間もかかった。

被災後二カ月がたつが、道内最大の総合病院にあたる江原道人民病院には、道内各地からの重症患者がまだ入院していた。肋骨や手足の骨折、頭部の打撲といった外傷だけでなく、心理的にも深い打撃を受けている様子が見え隠れした。「貯水池の決壊で、村全体八十世帯の水が流されてしまった」（金化郡からの患者）といった体験をすれば当然のことだろうと胸が痛んだ。なお、この病院は、被災直後に医師団四チームを被災地に派遣して応急処置にあたったといい、持ち運べる浄水器もたいへん喜ばれた。これまでも何度か訪れている江原道育児院には、ビスケットを持参した。洪水で親を亡くしたりした子ども二十八名が新たに入所したという。預けられている人数が一割も増えたことになる。

朝鮮赤十字会の李虎林部長は、「冬を目前にして、寒さをしのぐ住宅建設、医薬品、燃料の確保など課題は山積みだ。多くの農地が被害にあっているために収穫も期待できず、食糧事情もここ数年で最も困難な状況になりそうだ」と危惧していた。国際赤十字連盟やWFP（世界食糧計画）などの緊急支援要請にはEUを筆頭に各国が応えているが、日本政府は依然として人道支援に取り組まない方針だ。今回、江原道人民病院の薬剤師が浄水器や薬品の説明書を手にして、「日本語が少しわかりますから大丈夫です」と話す姿に、地理的・歴史的な近さを強く意識させられた。これほど「近く」に暮らす人々が置かれている状況に目をつぶったままで良いのか。そして、「国の関係は良くないが、日本の市民からの心遣いには感謝している」との言葉に、市民の手から手へと届ける支援が可能だということ、日本からの声を伝え続けることがいかに大切かを痛感した。



その地に
生きる人々

4

南アフリカ

リンポポ州 カプリコーン郡
レペレ・ンクンピ地区 ツゥイン村

セリーナさん



■近所の人たちと共同で作った家庭菜園で水をやる。



■セリーナさん(右端)が教えている学校の菜園に参加しているメンバーたち。

『薬や症状のことを知ることで、不安が減った』

南アフリカ リンポポ州での活動

人口の約十二%にあたる五百五十万人がHIVに感染している南アフリカでは、HIV/エイズが特に貧困層や地域社会に深刻な影響を及ぼしています。貧困州であるリンポポ州では政府の対策も遅れており、情報や支援が少ない農村部では、偏見や差別が強く、HIV陽性者は孤立しがちです。

JVCでは、地域でHIV

V陽性者をサポートする体制を向上させるため、現地NGOと協力して、在宅介護活動の強化、正しい情報を伝えるための予防啓発活動、栄養改善のための家庭菜園研修などを実施しています。



セリーナさんは妊娠をきっかけに自分がHIV陽性であることを知ったという。三回の流産を経て四回目の妊娠のことだ。彼女の恋人はブラチナ鉱山で働いており、すでにHIV陽性だったが、彼女にそれを隠していた。妊娠を知ると、彼がHIV検査を勧めてきたという。昨年七月、セリーナさんが陽性であることがわかったと、自身も陽性であることを告白してくれた。

彼女は現在、地域の陽性者サポートグループに参加し、JVCが支援する菜園研修や陽性者向けのHIV/エイズ研修などに参加している。研修を通して、「体の免疫を高めるために、野菜や果物など健康に良い物を意識してバランスよく食べるようになった。また、薬や病状のことを知ること、自分自身の症状にも落ち着いて対処できると思う」と言っている。

また、研修で学んだことを活かして、近所の人たちと協力して家庭菜園を作っているそうだ。さらには、それを学校の菜園で広めるプロジェクトを始めるなど、地域との係わり合いの中で学んだことを積極的に活かしている。

セリーナさんは明るく、素直で若い。熱心に活動する姿から、周りの人たちから信頼されていることが伺えた。

※注① Antiretroviral drug = 抗レトロウィルス薬。HIVの増殖を抑える効果がある。

※この記事は、支援活動を共同で実施しているシェア＝国際保健協力市民の会で作成された記事を参考に構成しました。

スタッフのひとりごと

出勤前の薪拾い

事務局長 清水 俊弘



イラスト／かじの倫子

景色と空気に惹かれ山梨に自宅を構えて、今年で丸10年になった。東京との往復生活にもすっかり慣れた。3年前、家の敷地の一角で、つれあいが小さなカフェを始めた。地元の野菜を使ったランチプレートと国産小麦・天然酵母のパンを売りにしている。週末は私もエプロンを付けお店を手伝うが、お客さんとの語らいもいい気分転換になる。

先月、庭に念願の石窯を設置した。これでパンを焼けば、オープンとは違った味と香りが楽しめる。ピザもおいしいに違いない。早速、薪を拾い

に近くの森に入る。それまで散歩の時には邪魔だった足元の枯れ木が宝に見える。不気味だった立ち枯れの枝も水晶の剣のようだ。私はその宝を両腕に抱えて持ち帰り、窯にくべる。重厚な壁を持つ窯の温度が上がるまでにはかなりの時間がかかる。あっという間に1時間くらい過ぎてしまう。ようやく250度まで上がった窯にパン生地を入れる。いい香りだ。焼きあがったパンを食べてみる。なんとという食感！これぞ至福の時。粉は地元の小麦、酵母も地元産のブドウから起こし、燃料は目の前の森

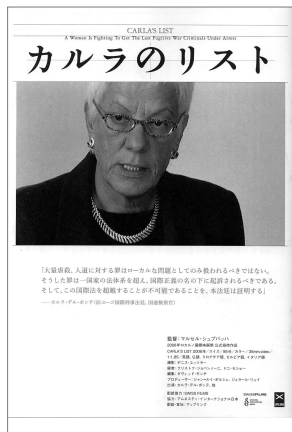
にある。なんと口ハスな！と、勝手に感動している。あれから一月、こうやって下草を踏み、枯れ木の始末をすることで、森が生き生きとしてきたようにも見える。これが自然との共生かと思いがったりもする。身近な所で自然の恩恵を実感できる生活に感謝したい。

…が、月曜の出勤前の薪拾いはちょっとしんどい。

『カルラのリスト』

みるよむきく

監督：マルセル・シュッパハ 配給・宣伝：アップリンク



「国際正義の遂行には困難を伴うこと」、そして「困難な状況にあってもあきらめないこと」。映画はこの二つを描いている。ソ連崩壊に端を発する旧ユーゴ紛争では、共和国の独立・分離・解体のたびに紛争や悲劇が起こってきた。旧ユーゴ国際刑事法廷（ICTY）は、九一年以降のこの地域における戦争犯罪の責任者を起訴して裁くことを目的に設置された国連機関だ。この映画は、そこで働く国連検察官のカルラ・デル・ポントテ女史の活動を追う。カルラのリストとは、その戦争犯罪人たちの顔が「賞金首」のように並んでいるリストのことだ。

「大量虐殺、人道に対する罪はローカルな問題としてのみ扱われるべきではない。そうした罪は一家の法体系を超え、国際正義の名の下に起訴されるべきである」というゆるぎない信念のもと、彼女は活動を続ける。それは、旧ユーゴ紛争のなかで発生した大虐殺の遺族たちが、逃亡を続ける首謀者が捕まることを今も強く願っていることを、彼女が知っているからだ。

ICTY自体は二〇一〇年の閉鎖が決まっているが、〇三年に設置された国際刑事裁判所によって、同様の案件は引き続き追求されていく。映画を見終わった後で「世の中には凄い人がいるんだな、大変なことはそついう人に任せよう」と考えるのは簡単だが、本当にそれだけでいいのだろうか。国や世代を超えて示される、「困難な状況にあってもあきらめないこと」の大切さを、私たち自身がどれだけ自分自身の暮らしのなかで意識していけるだろうか、と改めて問いかけられた思いだった。

（云報誌レイアウト／総務担当 細野純也）

※ 2007年12月にアップリンクXにて公開中です。上映時間はそちらにお問い合わせください。

アップリンクX 電話：03-6825-5502 <http://www.uplink.co.jp/>

Trial & Error No.264 (2008/1-2)

JVCは、現在10の国／地域で活動しています。

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善(CLEAN)

07年からシェムリアップ県35村で活動。稲刈りが始まり、幼苗一本植え(SRI)と伝統的な方法の収穫の比較を農家自身が実施。新村で基礎調査。家庭栄養菜園と貯金グループ研修。



■幼苗一本植えで植えた田でなった米の数を数える農家。

■持続的農業と農村開発 (SARD)

安全な水や食糧確保を目指し、94年からカンダール県50村で活動。5小学校の環境教育で、生徒に自宅で植える苗木配布。プノンペンで土曜に、大学生とNGOワーカー向け環境教育の研修を開始。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を94年から提供。農民協会の資料センター(CRC)6カ所は半年で、約620人が利用、約550冊の本と約150枚のビデオCDを貸し出した。CRC運営能力強化の研修計画・教材準備。

■技術学校

85年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を開始。10月に入試を行ない、新入生72人。全生徒は計115人。移転先の建設工事許可について協議。

■アドボカシー／調査提言／ネットワーク活動

大使館/NGO/JICA/JBIC定期協議会の連携促進会で、人権/グッドガバナンスと農業農村開発の協議と提案に協力。08年総選挙に関する準備に協力。(以上米倉)

タイ

■農村派遣研修

国際協力や自然環境保護に関心のある人を対象に、タイの農村に滞在しながら「農村の暮らし」や「開発の意味」について学ぶ研修プログラムの再開に向けて準備を進めている。プログラムの詳細を組むために9月から東北タイに出張し、研修生の宿泊・研修施設の建設を手伝った。また、農村への派遣先となる受入れ農家を訪問したり、研修生の長期ビザ取得のためにタイの現地NGOへ協力を打診し、それぞれ了解が得られた。この研修プログラムは08年5月より開始する予定。(下田)

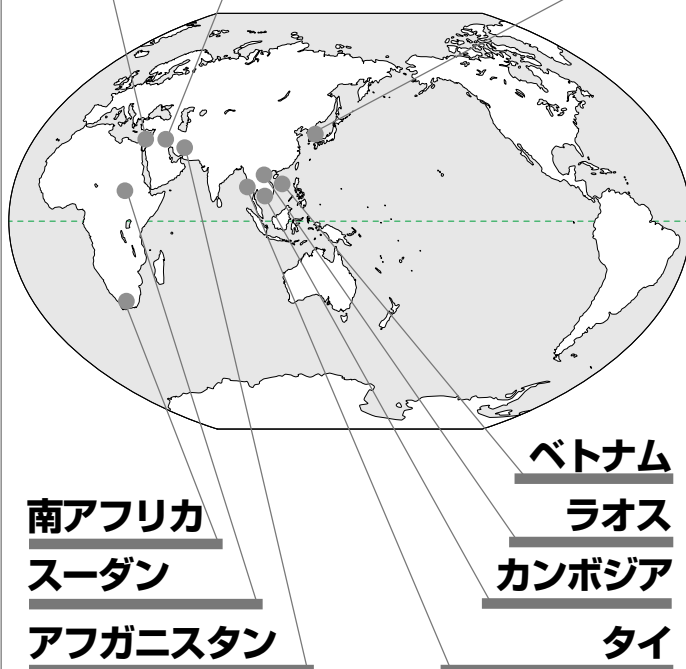


■研修生の宿泊・研修所を建設した。

イラク

パレスチナ

コリア



南アフリカ

スーダン

アフガニスタン

ベトナム

ラオス

カンボジア

タイ

ラオス

■森林保全

村人の生活の源である森林を守り、持続的に利用していくために、各村の森林ボランティアを対象にした「森林管理研修」を実施した。9村約



■共有林の利用状況を説明する森林ボランティア。

20名が参加し、自分たちの生活と森との関係を振り返り、森の重要性を再認識すると共に、自然資源が豊かに残るクワンクワイ村の共有林で、存在する樹木を把握する実地調査を行なった。また、工場建設の影響が見られる村にて、村の土地や森林の権利を確保するため、「土地森林委譲」の実施を進めている。

■複合農業・生活改善

十分な食料確保のため、米の収量増加や果樹栽培に取り組んでいる。10月初旬の大雨の影響が懸念されたが、幼苗一本植え(SRI)農法を実施する11村では、稲刈りをほぼ無事に終え、現在、試験田における収量を調査中。灌漑を使用した乾季稲作を行なっているタナータイ村ではSRI農法の実施を希望しており、1月からの導入を目指して研修を開始した。7月に果樹栽培研修を行なった際に接木した苗は十分に根を生やしており、植替え作業を行なった。(以上尾崎)

イラク

■ガン・白血病医療支援

不足している医薬品をJIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）との連携で提供している。引き続きバグダッド、バスラ、モスルの4つ

の病院に抗ガン剤や抗生物質等の医薬品をヨルダンから搬送した。11月にはマレーシアでイラクと日本の医師が集い、病院の状況や今後の支援について話し合われた。イラクの医師同士でも貴重な情報交換の機会となった模様。

■国内避難民支援

治安の悪化で220万人を超える人々が国内避難民となっている。収入がないなど特に困難な状況にある家族を対象に、現地団体の協力で米5キロと豆2キロの食料セットを提供。アンバール県ファルージャで566家族、バグダッドで496家族に無事に配布された。これらの支援は避難民を受け入れている家族の経済的な負担を軽減することにもつながっている。年内に再度配布を行なうべく準備中。支援の調整のためにヨルダンに駐在した田村幸恵が、11月下旬にイラク研究者酒井啓子氏を交えて報告会を行なった。（詳細は2～6ページを参照）（以上谷山）



■困難な状況の避難家族に米と豆を提供した。

ベトナム

■農村開発（ホアビン省）

村人が食料を安定的に確保できるようになることを目指して活動している。その一環として、稲作技術に関する3つの改善方法（幼苗一本植

え、アヒル水稲同時作、魚水稲同時作）に村人と共に取り組んできた。10月の収穫直前に対象地域を大型台風が襲い、村人は稲や魚が流されるなど被害に遭ったが、11月に開催した評価会合では3つの方法ともに稲の収量が増加したことがわかった。また、アヒルや魚を飼っている世帯では食事の改善と現金収入の向上につながったことが明らかとなった。評価会合には383世帯（全体の約3割に相当）が参加し、関心の高さが窺えた。

■ネットワーク

農業農村開発省と農業分野を支援する各国との総会に向けて、農業分野で活動を行なっている国際NGOが協働でメッセージを作成し提出した。また、12月に開催されるベトナム支援国会合に提出するためのメッセージの作成が始まり、農村・農業に関するメッセージを盛り込めるよう、他の国際NGOと話し合いを行なっている。（以上伊能）



■幼苗一本植えを行なった水田では2割ほど収量が増えた。

コリア

■『南北コリアと日本のともだち展』（子ども交流）

韓国、北朝鮮、日本の子どもたちの絵画を集めた『ともだち展』が、今年も国内を巡回している。10月に江東区

の「多国籍プチフェスタ」にて展示を行なったほか、11月には浦和コミュニティセンターにてさいたま展が開催された。さいたま展では、朝鮮半島の民衆劇で使用される仮面の製作をはじめ、さまざまなワークショップが行なわれて人気を集めた。また、12月初旬には松山展が開催される予定。

■KOREA こどもキャンペーン（水害緊急支援）

今年8月に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）で起こった水害に対し、JVCを含む7団体が「北朝鮮水害復旧支援キャンペーン」を立ち上げて支援を呼びかけた。集まった募金をもとに10月下旬、参加団体メンバー4名が医薬品支援のため東海岸に位置する江原道を訪れた。総合病院にあたる江原道人民病院や、親を亡くしたりした子どもたちが預けられている江原道育児院などを訪問。人民病院に抗生物質や栄養剤などの医薬品、携行用浄水器を支援したほか、育児院の幼児向けには総合ビタミンビスケットを支援した。（詳細は8ページの報告を参照）（以上寺西）



■さいたま展の会場で行なわれた折り紙ワークショップ。

南アフリカ

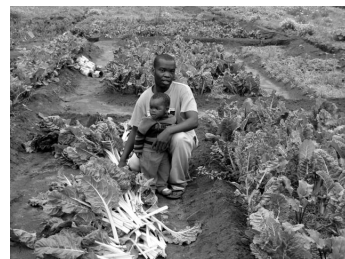
■環境保全型農業（東ケープ州）

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を実施。干ばつがひどかったが、10

月初めに7ヵ月ぶりに雨が降り、農民は夏作物（とうもろこしや豆）や野菜の栽培に励んでいる。カラ地区の7ヵ村で環境保全型農業の実践に取り組む篤農家を対象に、TOT（トレーナーのためのトレーニング）を行ない、他の農民に教えていく「トレーナー」としての資質を向上させていくよう活動した。（津山）

■HIV/エイズ（リンボボ州）

感染予防、在宅介護、HIV陽性者およびエイズで親を亡くした遺児への支援を実施。家庭菜園研修を継続して行なっている。夏に入り、各参加者の家庭菜園でも多彩な野菜が収穫されている。地域の学校で共同菜園を始めたHIV陽性者の参加者や、エイズ遺児に野菜を寄付する人、余りを隣人に販売する人も出てきた。パートナー団体の組織強化として、過去6ヵ月の活動の振り返りと08年度の計画作りを行なった。予防啓発活動として、陽性者支援グループの主催で、コミュニティでのHIV/エイズ啓発キャンペーンを行なった。（水寄、津山）



■エイズ遺児に届ける野菜を収穫する。

パレスチナ

■幼稚園児栄養改善支援

ガザの幼稚園児約550人への栄養改善支援。西岸ヘブロン産の牛乳と西岸ラマッラー産のビスケットを配布中。今年は聴覚障害の園児の早期発見も試みる。(小林)



■医師の診察を受ける小学一年生の男の子。

■巡回診療支援

エルサレムの医療NGOによる巡回診療・健康教育を支援。9月中旬からの断食月は学校での健康教育が中心。ラマダン明けからは学校での健康診断も再開。(小林・福田)

■ガザ緊急支援

7月中旬から、ガザの栄養失調児に治療用栄養食提供してきたが、ラマダン月で各方面からの食糧支援もあり、一時的な落着きを見せたとして休止中。今後の支援を検討中。(小林)

■子どもの文化・教育支援

ベツレヘムの難民キャンプのハンダラ文化センター支援。9月後半には日本からのボランティアがエプロンシアターを披露、子どもたちも大喜び。(小林)

■収入創出支援

上記センターの女性グループの刺繍プロジェクトを支援。グループメンバー自身により来年度の計画を立案。日本からの来客もあり、日本の女性たちとの交流の機会も持った。(福田)

■アドボカシー

11月11日～16日にかけて、イスラエル・パレスチナからイスラム教、キリスト教、ユダヤ教の宗教学者を日本に招聘し仏教学者との対話、中東研究者・一般市民との交流を図った。(詳細は7ページの報告を参照)(小林)

調査研究・政策提言

■日韓市民社会フォーラム

ソウルに日本と韓国のNGOが集まり、国際協力や気候変動といった国際的な課題や今後の市民社会の可能性と課題について話し合う5回目のフォーラムが10月に開催された。「ODAと国際協力」のセッションにて高橋がリソースパーソンとして参加。日韓で協力してODA改革を進めていくことを確認した。

■NGO 外務省 ODA 政策定期協議会

名古屋NGOセンターで今年2回目のODA政策協議会が11月に開催された。ビルマのODA問題、フィリピンの人権侵害とODA、新JICAに向けた環境ガイドラインの改訂プロセス等について議論した。今回、当事者であるビルマ人がはじめて参加した。(以上高橋)

アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善のための地域保健事業(ナンガルハール県)

診療所の運営を中心に、地域保健員の育成など地域に根ざした医療を支えている。公共保健サービスの拡充のため、保健省は診療所から離れた村々に小規模の補助診療所設置を推進している。JVCも担当地域内に2カ所の補助診療所を設置する計画。また、山間部の孤立した村(診療所から車で2時間)であるサルカンド村で10月から1回、診療と予防接種を組み合わせた出張診療を開始した。



■出張診療が始まると130人もの患者さんが訪れた。

■教育支援(ナンガルハール県シェフ郡)

来年1月に予定される小学校低学年担当教員に対する新方式教科書の使用法研修に向けて準備を開始。

■アドボカシー

現地でISAF(国際治安支援部隊)主催の会合に参加し、軍関係者による人道支援に名を借りた民心獲得に異議を申し立てた。アフガンで活動するNGOのこのような努力が実り、人道支援の中立をうたった民軍関係ガイドラインが国連とISAFに承認されることとなった。(以上藤井)

日本では10月、対テロ戦争と日本の軍事支援の見直しを求める声明を発表。軍事支援でなく、包括的平和協議、NGO・国連による復興支援の強化を訴えた。またNGO6団体で、軍事でなく平和的アプローチを求める要望書を各党に提出。(長谷部)

スーダン

■車両整備を通じた難民帰還支援(南部)

国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)からの要請で、10月より「南部スーダン救援復興委員会」(難民帰還、復興事業を担当する政府機関)が所有する12台の車両整備・修理も担当することになった。修理・整備作業を数多く経験させることで、元難民の研修生も力をつけてきている。



■元難民の研修生と歓談する代表理事の谷山。

一方で、研修生への講義も順調に進行しており、予定より早く11月中には、今年6月に研修を開始した第2期生10名(ジュニアインターン)の講義内容が、第1期生5名(シニアインターン)に追いつく。その後は、ジュニア、シニアを統合してクラスを再編、より効率的に講義を行なえるようになる。

11月初旬に代表理事谷山、スーダン事業担当佐伯、理事アイネス・バスカビルの一行がジュバを訪問。活動のモニタリングやスーダン事業の今後について打ち合わせを行なった。(今井)

世界と「想い」で つながりたい

〈東京都〉常盤 佳子
よこわ よしこ

JVCとの最初の出会いは、友人の家のリビングにあったカレンダーだった。アジアの美しい風景に引き込まれながら、こんなに美しいカレンダーを通じての国際協力って素敵だな...と感じた。それが第一印象だった。

その後、イラク戦争のドキュメンタリー映画「リトルバース」の中でJVCと再会。目を覆いたくなるようなすさまじい映像の中、JVCの医療支援の様子には、私にとって唯一の救いともいえるものだった。薬品保存のための冷蔵庫の壁面には「JVC」のロゴ。あの素敵なカレンダーのマークだ!と映画館で一人興奮した。病魔と戦っている

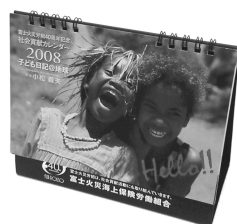


国内ひろば

JVC network

カレンダーで、JVCと 富士火災海上保険労組との コラボが実現!

JVC カレンダー
事務局 荻野

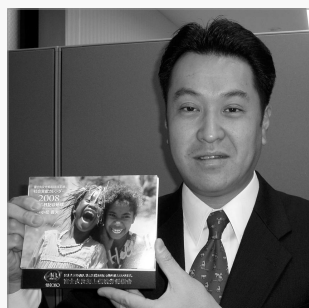


JVCの国際協力カレンダーは、毎年会員の皆様はじめ多くの支援者の方々にご利用いただいています。この度、富士火災海上保険労働組合が組合の四十周年の記念品にカレンダーの卓上型を活用してくださることになりました。組合員五千人の方々がJVCの卓上カレンダーを利用してくださること、その収益による活動の展開が期待されます。また、皆様それぞれデスクで年間カレンダーを使うことで、アジア・アフリ

カへ関心を持ってもらえれば大変うれしいことです。来年には、富士火災海上保険労働組合の有志の方にJVCのカンボジアでの活動を見ていただくツアーを計画しています。

模索しながらもなかなか実現しにくい労働組合とNGOのコラボレーション。今回のことはその大きな一例になると思われます。これをきっかけに、さらに労働組合、企業との協働活動を進めていきたいと思います。

富士火災海上保険労働組合 執行委員長
堀田 英一さん



私は、富士火災労組が〇八年に結成四十周年を迎えるのを機に、労働組合も社会の一員ということを再認識するために、何か社会貢献活動に取り組みたいと考えていました。そんな時、連合(日本労働組合総連合会)が主催

好評です! 「名入れ卓上カレンダー」

貴団体でも名入れの卓上カレンダーをご利用になりませんか? 記念品にも最適。貴団体の趣旨が伝わるアイテムです。

© JVC カレンダー事務局 荻野までお問い合わせください。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税の優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先
をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

9月計 3,819,335 円

10月計 7,776,066 円

	9月	10月
無指定	223,240円	4,295,973円
タイ	0円	0円
カンボジア	200,000円	0円
ラオス	103,000円	461,330円
ベトナム	1,230,442円	3,000円
南アフリカ	1,000円	795,710円
パレスチナ	142,100円	2,027,053円
アフガニスタン	55,910円	19,000円
コリア	103,000円	72,000円
イラク	1,760,643円	102,000円
スーダン	0円	0円

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

9月計 280,500 円 / 23 件

10月計 227,500 円 / 21 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用
する手軽な募金方法です。

9月計 1,556,200 円 / 1,345 件

10月計 1,545,400 円 / 1,366 件

編集後記

新聞、雑誌、ニュースサイト、メルマガ、
書籍、テレビ、ラジオ…。現代において、情
報を取得する手法は幾らでもあり、情報量
に限りはない。リテラシーなしには困惑す
るか盲信するしかないほどに。しかし、い
わゆる「昔ながらの智慧」や「古典」の類
いは、時に恐ろしいまでに合理的で、かつ
真理を照らし出す。生きた経験とその蓄積
を侮ってはならない。Google だけに頼っ
ていては知は枯れる。温故知新ですね。(H)

新スタッフ紹介

佐伯 美苗 さへき みなほ



スーダン事業担当

これまで他の NGO で、緊
急・復興支援、難民支援など
に携わってきました。
着任後、早速南スーダン・
ジュバに初出張しました。これまでイスラーム
圏には長く親しんできましたが、「初アフリカ」
での全く異なる文化慣習にびつくりの連続でし
た。けれども、総じて明るく純朴な南スーダン
の人たちにあたたく迎えていただきたという
また、平和な国を自分たちでつくりたいという
気持ちと言葉の端々に感じられ、そのお手伝い
ができることが嬉しく思えました。

スーダンの平和構築、復興支援になぜわれわ
れ JVC が取り組むのか？この問題意識を、日
本の皆さん、会員の皆さんに伝え、また議論を
起こしていきたいと考えています。

武繁 政昭 たけしげ まさあき



経理担当

最近読んだキャリア・デ
ザインの本に、四十歳は一
日の中で正午にあたる、と
書いてありました。「そう
か、これから寝るまで時間がたつぷりあるん
だ」、これから何をしたらいいんだろう？」と
思い、気がついたら JVC で働いていました。
スーツにネクタイを締め、朝礼で一日が始ま
る、という会社生活から、私服 OK、経理担当
とはいえカレンダーやちらしの封入作業をし
たりと、がらっと生活環境が変わりました。そ
ろそろ一ヵ月、そんな環境にもだいが慣れて
きました…。

NPO でも「内部統制」という言葉が聞かれ
るようになりましたが、内部統制の体制作り
など、JVC の現場での活動をバックアップ
するべく、努力していきたいと思っています。

【富士火災海上保険労働組合】

富士火災海上保険株式会社(損害保険)、富士生命保険株式会社(生命保険)
の従業員で構成された単位企業別労働組合。組合員数約 5,000 名。

する「NGO・労働組合 国
際協働フォーラム」に参加
しました。中でも、「国際協力力
レンダー」は身近にできる社
会貢献活動であり、四十年
記念として作成しようと決
めたのです。今後は JVC さ
んにもご支援いただき、活動
地を訪れるツアーなども実
施したいと考えています。そ
して、十年後二十年後に、富
士火災労働組合の組合員の中
にボランティア精神がしっか
りと根付いていることを期
待しています。JVC さん、
今後ともよろしく願ひい
たします。

会員専用ページパスワード (1~2月) →→→

S8yi62VxPk

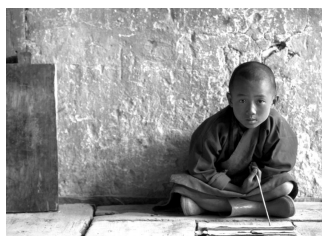
※ JVC ホームページの会員専用ページでは、T&E のバックナンバーを順次公開
中です。現在、この作業を手伝って下さる方を募集中。細野までご連絡を！



1月: 手伝う
イラン/マースレー



2月: 運ぶ
ナミビア/カリビブ



3月: 学ぶ
ブータン/プムタン地方



4月: 着る
ペルー/ピサック



5月: 帰る
仏領ニューカレドニア/リフー島



6月: くつろぐ
モーリタニア/ネマ



7月: 遊ぶ
仏領ニューカレドニア/リフー島



8月: 登る
ネパール/東タライ地方



9月: 祝う
セネガル/カザマンズ地方



10月: 背負う
ブータン/パロ



11月: つなぐ
ミャンマー/ニャウンシュエ



12月: 働く
シリア/ハマ郊外



JVC 国際協力カレンダー 2008

『子ども日記@地球』

来年のJVC国際協力カレンダー『子ども日記@地球』(写真:小松義夫氏)。すでにお手にされた方々からはご好評いただいております。今年は、卓上型も作りました。オフィスで、パソコン周辺でいかがでしょうか。ご注文はお早めに、ご利用をお待ちしています。



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回の会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数 (12月3日現在) 合計 1,365人
(正会員 655人 賛助会員 710人)

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料。予約不要です)

第1月曜日 午後7:00 - 8:30

第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30

※会場はJVC東京事務所です。

■E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。